心電図　（所要時間：約 5～10 分）
心臓が拍動するときに生じる電気信号をキャッチし、波形として記録します。
脈の乱れ(不整脈)や胸の痛み、動悸などの症状の診断のために行う検査です。
手術を受ける前や、健康診断でも行われています。

ホルター心電図　（所要時間：約 10～20 分）
日常生活の中で小型の心電計を長時間携帯して、心電図の異
常や変化を記録します。通常の心電図検査では見つける事が困難な不整脈の検出や、狭心症、ペースメーカの評価を目的とした検査です。
目的に応じて誘導を増やすことや、血圧を同時測定することもあります。

平均加算心電図（LP）　（所要時間：約 30～40 分）
胸と背中に電極を貼り、10 分間の安静状態での心電図を複数回記録します。
心筋梗塞や心室細動など、不整脈による突然死の危険性を判断する上で有用な検査のひとつです。

負荷心電図（トレッドミル、マスター）　（所要時間：約 30 分）
トレッドミルは電動式ベルトコンベアーの上を歩いたり走ったりしながら、マスターは階段を上ったり下りたりしながら心電図と血圧を記録する検査です。
主に心臓病（虚血性心疾患・不整脈）の診断とその重症度の判定のために行います。

血圧脈波(ABI)　（所要時間：約 15～20 分）
ベッドに横になって、心電図と心音図、両腕・両足首の血圧と脈波を同時に測定する検査です。
脈波伝播速度（PWV）や足関節／上腕血圧比（ABI)を測定することで動脈硬化の程度、足の血管に詰まりがないかどうかの評価を行います。

呼吸機能検査　（所要時間：約 10～40 分）
大きく息を吸ったり吐いたりして、肺活量・息を吐く速度・肺の中のガス濃度を測定することで肺の機能を調べる検査です。
呼吸器疾患の有無や治療効果の判定、手術前の肺機能の評価等を目的としています。
正確な結果を得るためには、患者さんの努力が不可欠です。大変ですが、技師とともにがんばりましょう。

呼気 NO　（所要時間：約 5～10 分）
一定の勢いで呼気を 6～10 秒、検査装置に呼出して行います。
吐いた息に含まれる一酸化窒素（NO）の濃度を測定し気道の炎症状態を評価します。
気管支ぜん息では炎症により NO 合成酵素が発現し産生が亢進します。

脳波　（所要時間：約 1 時間）
頭に小さい電極を取り付け、脳が活動するときに出ている微弱な電気信号を頭皮上から記録する検査です。
この波形から脳に関する病気の診断や、治療効果の評価を行います。

誘発筋電図（神経伝導速度）　（所要時間：約 30 分～1 時間）
手足に電極を付け、皮膚の上から弱い電気で刺激して、その刺激によって筋肉が動くときに生じる電気活動を記録します。神経に刺激が伝わる速さを調べ、筋や神経に障害が発生していないかどうかを見る検査です。

誘発電位（SEP、VEP、ABR）　（所要時間：約 30 分～1 時間）
身体に電極を付け、音やモニター画面、電気を用いて刺激することで発生する電気活動を記録します。
脳や神経、聴力に関する病気の診断を目的に行います。

超音波検査　（所要時間：約 30 分～1 時間）
人の耳では聞くことのできない周波数の高い音（20,000 ヘルツ以上）を超音波といいます。
この超音波を体の外側から当てて、はね返ってきた反射波を映像化し、臓器の大きさや病態の有無を観察します。また、止まっているものだけでなく、動いているものや血液の流れなども観察することができます。
被爆の心配がないので、小さなお子様や妊娠中の方でも安心して検査が受けられます。当院では腹部、心臓のほか、乳腺、甲状腺、血管など幅広く検査を行っています。
目的によって、食止めや尿溜めを行います。検査予約時にお渡しする案内に書いてある注意事項を確認してください。服薬については外来での医師の指示に従ってください。

睡眠時無呼吸検査　（所要時間：機械の説明 約 15 分）
睡眠時無呼吸症候群とは、眠っている間に気道がふさがれ、呼吸が浅くなったり（低呼吸）、止まったり（無呼吸）したのちに、大きないびきとともに呼吸が再開する状態が何度も繰り返される病気です。病気の診断や、重症度の判定、マウスピースなどの効果判定のために行う検査です。
検査機器を自宅に持ち帰り、就寝前に 3 つのセンサーをご自身で装着した状態で寝ていただきます。検査は、1 日から 2 日間行います。

終夜睡眠ポリグラフィー(PSG)　（所要時間：機械の装着 約 40 分～1 時間）
検査は一泊入院で行います。
頭・手足・口鼻に電極・センサーを取り付けて、睡眠中の 10 秒以上の無呼吸や低呼吸の有無を調べる検査です。
同時に脳波の測定も行いますので、良質な睡眠をとれているかどうかも分かります。

尿素呼気試験　（所要時間：約 25～30 分）
診断薬を飲む前と飲んだ後の呼気を分析して胃の中のピロリ菌の有無を調べる検査です。
ピロリ菌は胃の中に好んで住みつき、胃の壁を傷つける細菌で、胃炎、胃・十二指腸潰瘍、胃癌などの発症と関係があることが明らかになっています。